

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：15301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884047

研究課題名(和文) 説話史料を活用した仏教版画の像内納入に関する研究

研究課題名(英文) Study on putting Buddhist Prints into Sculptures by making use of Narratives

研究代表者

佐々木 守俊 (SASAKI, MORITOSHI)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：00713885

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中国と日本の仏教説話を参照しながら、仏像の像内に印仏が納入された信仰的背景を考察した。特に地蔵菩薩彫像への印仏の納入に注目し、大量の地蔵菩薩画像の像内納入を記す早期の史料である北宋代の『地蔵菩薩応驗記』の記載を検証した。同時に、その画像が日本では版画と認識された可能性を考察し、平安～鎌倉時代の印仏納入の思想的源泉を北宋代の信仰に求めた。さらに、彫像による千体地蔵の諸作例や経典の記載を視野におさめることで、印仏を納入した地蔵菩薩彫像は多数の分身を伴う姿を表した作例であるとの見通しを立てることができた。

研究成果の概要(英文)：This study examined the belief in putting Buddhist prints into the internal space of sculptures by making use of narratives in China and Japan. And paid attention specially to sculptures of Jizo Bosatsu, examined Jizo Bosatsu Ogenki in Northern Song, which was an early record about putting many Jizo images into the sculpture. Besides, examined probability that Jizo images told in Jizo Bosatsu Ogenki were recognized as prints in Japan, and that the belief of Northern Song was the ideological source of putting prints into sculptures from Heian to kamakura period. And recognized that Jizo sculptures which had prints in them expressed the state of being many aler egos, by looking at sculptures of groups of one thousand Jizo and descriptions of sutras.

研究分野：日本仏教美術史

キーワード：印仏・摺仏 地蔵菩薩像 像内納入 大量造像 仏教説話

1. 研究開始当初の背景

(1) スタンプ式の小型の仏教版画である印仏は、日本の版画史において重要な位置を占めるが、手軽におこなえる多数作善との理解が大勢を占め、流行の根本的な要因はあまり論じられてこなかった。また、仏像の像内に印仏を納入した事例は多く存在するが、彫刻史研究においては、造像の際の動進に使用された事例がおもに注目される一方、像内納入の起源や信仰背景が明らかにされることはなく、印仏を納入した仏像の存在意義は不明確だった。

(2) 但し、印仏研究は大正時代以来の伝統を有し、作品に関する情報は豊富に蓄積されており、新発見も相次いでいる。これらの作例から得られる知見を踏まえつつ、近年さかんな像内空間や納入品、また生身仏に関する研究成果を参考にすることで、印仏の像内納入の意義についても新たな観点から見直すことはじゅうぶんに可能であると期待される。研究代表者はこれまで、平安時代の諸作例についておもに造像銘記の検討を通じ、その造立事情と印仏納入の意義を考察してきた。

(3) さらに、経典、寺院史料、日記類、願文など、仏教版画の制作に触れた文字史料は多く知られており、平安時代後期以降の流行をものがたる。しかし、その像内納入を明記する史料は少ない。しかし、遼代の仏教説話集を原本とする『往生浄土伝』、また別本の『漢家類聚往生伝』は版画史研究において早くから注目されており、中国または日本の仏教説話集は有益な情報源である可能性が考えられる。研究代表者はかつて、北宋代の『地藏菩薩心願記』所収の説話を印仏の像内納入を示す史料と位置づけたが、説話内容の解釈には再考の余地を残した。この点については、他の説話との比較を通じ、より明快な結論が得られると期待される。

2. 研究の目的

上記の研究動向を踏まえ、本研究では説話史料の記載を積極的に活用しながら、彫刻史研究と版画史研究を統合し、印仏の像内納入のもつ美術史的意義を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 印仏を納入する仏像、またこれとの関連が考えられる、多数の小彫像を伴う仏像の情報を幅広く収集する。特に、しばしば印仏にあらわれ、「千体地藏」としての現存作例も知られる地藏菩薩に注目し、造立事情と印仏納入を考察する。

(2) 説話を中心とする文字史料、とりわけ彫刻史・版画史研究において従来あまり注目されてこなかった史料に目を向け、印仏制作、または多数尊の像内納入に関する記述を探索する。これらの検証結果と、実作品から得られる知見を照合することで、印仏制作と像内納入の信仰背景を考察する。

(3) 中尊が多数の小像（印仏または彫像）を像内におさめる作例について、図像学的な観点から見直し、典拠や多数尊構成の意味を考察する。この際、経典や説話史料などの文字史料を詳細に検討することで、功德を期待した大量造像との理解を乗り越え、教義上の根拠や歴史的展開を明らかにすることを目標とする。

4. 研究成果

(1) 北宋・端拱2年(989)の『地藏菩薩心願記』に収録される僧定法の説話について検証した。本説話には大量に「摸写」した地藏菩薩像を等身の彫像に納入したところ、彫像が光明を放ったとの記述が見られ、多数尊の画像を彫像に納入する信仰が北宋代にさかのぼることが確認される。この信仰形態は印仏の像内納入を思わせるが、「摸写」は肉筆による筆写を意味する可能性もあるため即断は難しい。一方、同じく『地藏菩薩心願記』所収の僧俊の説話にはやはり地藏菩薩像を「摸」したとの記述が見られる。同説話を収めた鎌倉時代の真福寺本『地藏菩薩心願記絵詞』には「地藏菩薩をすりて」との記述が見られ、「摸」する行為は明らかに版画制作と認識されている。僧定法説話の成立当初、「摸写」が版画制作を意味していたかは不明だが、僧俊説話を参考にすれば、日本ではこの説話が大量の版画制作と像内納入をものがたるものと認識されていた可能性が考えられる。このほか、『小右目録』と「比丘尼法薬埋納作善供養目録」が版経をそれぞれ「摸本」「模経」と記すなど、平安時代の史料には「摸」「模」を木版印刷と結びつける用法が確認される。以上の点を勘案すれば、日本における印仏納入は中国の信仰に刺激を受けて成立したとの見通しが立てられ、僧定法説話のような仏教説話も印仏納入の発想源として重視される。

(2) 印仏を納入した地藏菩薩像の関連作品として、京都・寂光院像、京都・報恩寺像、奈良・福地院像など、大量の小像を周囲に配するか像内に納入する「千体地藏」の諸作例を実査し、経典や密教事相書の記載を参照しながら、多数尊構成の図像的意味を考察した。『地藏菩薩本願経』には、地藏が無数に分身して衆生の苦しみを救うとの教説が明快に説かれ、大量の地藏像は分身を表現したものと解される。特に、報恩寺像は岩山の中央に地藏菩薩半跏像1軀を配し、その周囲に大量

の微細な地蔵菩薩立像が立ち並ぶさまを配した、叙景的な作例として注目される。この岩山が地蔵菩薩の住处である（キヤ）羅陀山をあらわすことは明らかで、本像は無数の分身を伴う（キヤ）羅陀山の地蔵像として造立されたものと解される。千体地蔵にはこのほか、寂光院像など像内に多数の小彫像を納入する例もあり、国立歴史民俗博物館像のような作例は、後者の像内の小像を彫像ではなく印仏で表現したものと位置づけられよう。京都・六波羅蜜寺地蔵菩薩坐像には岩座上に坐る地蔵菩薩像の印仏が納入されている。この岩座も（キヤ）羅陀山とみなすことが可能と思われる。彫像本体の当初の台座の形態は不明だが、印仏の図像を考慮すれば、六波羅蜜寺像は報恩寺像と同様、分身を伴う（キヤ）羅陀山の地蔵像をあらわした可能性が指摘されよう。印仏や小彫像を納入する、または小彫像を周囲に配する地蔵菩薩像が多く造立されたのは、地蔵が分身するほとけという性格を濃厚に示していたことに由来すると考えられ、多数尊の制作手段として印仏の技術は効果的だったといえるだろう。

(3) 印仏の安置場所となる像内空間の性格や、印仏に限らず仏像の像内に小仏像を納入する信仰の成立と展開について、具体的作例や文字史料の検証を通じて考察を進めた。文殊信仰に関する重要経典である『仏説文殊師利般涅槃經』には、丈六の文殊菩薩の「身内心処」には六尺の「真金像」があるとの記載が見られる。「真金像」は『法華經』などにも用例が見られる語で、これが文殊像の内部にあるとする『文殊涅槃經』の記述は、仏像の像内に小像を安置する信仰の典拠となりえた可能性が考えられる。但し、由緒ある小像を安置するために大きな仏像を造立したことを記す説話は数多く、像内に「胎内仏」と称される小像を安置する実作例も多い。こうした胎内仏が「真金像」にあたるものとの理解は可能だろう。『地蔵菩薩応驗記』中の僧定法説話でも、大量に「摸写」された地蔵菩薩像を等身の彫像に納入したところ彫像が放光したと記されており、納入された地蔵像が靈性を持っていたとの認識が読み取れる。ただし、この地蔵像を由緒ある胎内仏と即座に同一視することは躊躇され、今後は関連作例の情報や、類似する説話、経典の記載を幅広く収集し、印仏の像内納入の意義についてより詳細に考察したい。

(4) 版画の印仏と密接な関係を持つ、印仏作法（尊像を彫刻した板状の法具を虚空、香煙、水面、砂上などに押しつけるしぐさを繰り返しながら、ほとけの姿を観想する行法）に関する文字史料を収集し、記述内容を検証した。遼代の往生伝を原本とすることが指摘される真福寺本『往生浄土伝』、また別本の神奈川県立金沢文庫本『漢家類聚往生伝』に印仏作法に関する説話が収録されることは

よく知られており、特に水面への印仏に関する記述は注目される。これと関連する史料には石清水八幡宮本『八幡管崎宮御神宝記』に付随する文書がある。それによれば、管崎宮の放生会に際し、尊像をあらわした「形木」（印仏作法に使用する木製の法具）を「浪上」に「三千度奉摺」ったといい、本史料の存在により、中国の往生伝中に語られる水面への印仏作法が日本に導入されていた形跡を見出すことができた。水面への印仏に関する従来の考察では密教図像集『阿娑縛抄』が用いられてきたが、本史料は印仏作法が行われた場所や法会の時期など、具体的な情報を提供する史料として貴重である。このほか、10世紀後半以降の諸史料には「印仏」の用例が見られるが、これらの記述はしばしば、版画の印仏と印仏作法のどちらを意味するのか即断しがたく、今後もいっそうの史料収集と検証を進めたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木守俊(SASAKI MORITOSHI)
岡山大学・社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：713885

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：